中国語教育における発音教育とその意義

－中国語インテンシブ教育の構築（1）－

秦　　耕　司

1．はじめに

言語は一義的には音声言語であり，意味は音声に宿っている。文字は音声を反映したものであり，音声と対応のない記号は文字ではない。文字文章に表現されている意味内容は，表音文字、表意文字を問わず音声に支えられているのである。とすれば，当然のことながら，外国語を教育・学習するには，音声の教育・学習を基本とすべきである。音声には母音や子音などの基本的な単位のほかに，さらに強弱や抑揚および口調やリズム等の実践的要素が含まれる。文字言語を教材とする講読や作文の授業と言えども，音声を基盤とすべきであろう。文字言語を見てもその意味が解らないところを，音読をして解ることがあるのは誰でも経験しているし，いい文章は音読をしてみると口調がよい。すぐれた音読力を身に付けることは作文力を向上させることに繋がる。ましてや中国語は，一音節一形態素の言語であり，漢字という形態素文字[1)]を正字として使用している一字、一音、一義の言語である。中国語は，単語が形態変化を起こさない。形態素（漢字）と形態素の結び付きが単語となり，連語となり，文となる。どのような意味を持った単位とどのような意味を持った単位が，どのような意味関係、どのような文法関係で結び付いているか。中国語習得上の重要なポイントである。中国語の発音教育・学習は，単に正しい発音を身に付けると

いうに止まらない，中国語の理解（読解力）と生産力（作文力）の養成、向上という語学教育・学習の本質的な面を含んでいるのである[2)]。単語、連語、文、複文などそれぞれの単位における文字の並びと音声の流れと意味関係。その意味関係を習得することが中国語学習の大きなポイントである。音声教育と講読，音声習得と作文。音声の習得を基礎に据えた読解力と作文力の養成こそ，能力としての語学力を習得できる，真の中国語教育ということができよう。ここで言う能力とは，語学的知識と理解力を主体とした基礎学力と，中国語を生産する力を兼ね備えた基礎技術力を基盤とした語学力を言う。

外国語の教育・学習は，発音から入るのが常套である。しかし中国語インテンシブプログラムは，その教育・学習の目的と目標を設定し，その実現に向けて方針を立てて教育指導をしているので，発音教育は単に正確な発音を習得するのを目的とするに止まらず，発音の習得が，中国語の習得においてどのような意味があるのか，その意味を教師も学生も認識しておく必要があろう。語学力が向上すれば，自ずといっそうの発音の向上を目指すようになるし，発音が向上すれば，実践力もより磨きがかかる。発音の習得度と語学力の向上には相乗効果と相関関係がある。小稿は，インテンシブ教育で進めるべき発音教育の基本を示すと同時に，中国語教育における発音の位置づけ，およびその意義を論述せんとするものである。

２．発音練習とは何か

音声教育・学習には，基礎となる発音練習の面と，実践力に結びつく音読練習の面とがある。発音教育・学習は，母音、子音などの単音と，その組み合せである音節，および強弱を含めて単語や連語の正確な発音を習得することを指す。音読は，正しい発音を基礎として，文や文章などの抑揚、強弱、緩急、ポーズの取り方，およびニュアンスや感情，また速度などを含めた音声全体の流れを習得することを指す。

発音にしろ，音読にしろ，ネイティブスピーカーについて物まね練習でスラスラ話せるようになることは可能で，実際にそのような人がいることも事実である。それはネイティブスピーカーの後についての徹底的した繰り返し練習の賜物である。しかしそれは，発声の仕方および発音の原理を理解し，それに基づいた発音練習を経ていないために，特に口の動きが弱く，簡単な会話ではスラスラと音読できたり，話したりはできても，内容が複雑になったり，ゆっくり、はっきりとした朗読読みとなると，途端に発音がくずれる人が多い。日本で十分基礎練習をせずに留学をした人に，このタイプが多い。一方，音声に関する基本的な知識を基礎に据えた，自覚度の高い練習による習得は，たとえネイティブスピーカーの発音には到達していなくても，そこには自分で練習努力をして身に付けた発声と発音の鍛えられた美しさと感動があり，その「人」の表れとして何物にも代えがたい価値があることも事実である。音声学の知識を基礎に発音の原理を理解すれば，正しい発音を習得するには，口と舌の動きのどのような点に注意して，どのように練習をすればよいか理解でき，ある発音についてどこがどう間違っているのかが理解、認識できる。また母語の似た発音との比較をし，その違いをはっきりと理解、認識することもできる。そして何よりも大事なことは，録音々声を介音やわたり音のように細部に至るまで，正しく聴く耳を持つことができるようになることである。この発音の原理に関する知識と，口と舌の動きをキャッチできる聴く力が，教師に付いての練習はもちろん，自分で練習をして正しい発音を習得できる要因となるのである。音声学的知識を基礎にした発音練習は，自分がどの程度正しく発音を習得しているか確認できる点からも，発音習得の効率から言っても，客観的な基準と目標に向かって正しい発音をより確実に習得できる，極めて有益な練習方法である。発音の基礎知識とは，中国語の発音習得に必要な音声学上の知識と，母語と中国語の発音上の共通点と相違点の音声学的理解であり，発音の基礎力とは，発音の原理に関する音声学の基礎知識と，音節および単語単位において明確な音声で正しい発音ができる基礎的な技

術力の総称である。基礎力を身に付けるとは，知識面、技術面が一体となった技能の習得である。

なお蛇足ではあるが一言付言すれば，発音練習の基準となりモデルとするのは，当然のことながら，標準音を話すネイティブスピーカーの発音である。習得の目標とする発音も同様である。日本人はネイティブスピーカーと同じ発音を習得するのは無理である，という見解もある。それは正しい。しかしそれは外国人という条件および限界からくる結果である。目標と結果を混同し，通じればよい，と最初から目標を低く設定すべきではない。教育指導の質を低下させ，教師も学生も中途半端なところで妥協し，上達の可能性をつみとることになるからである。

３．発音練習の順序について

それでは中国語の場合，どのような手順で発音教育を進めればよいであろうか。それを検討するために，先ず発音の基本的単位であり，実際に発音できる最小の単位である音節の特徴を見ることにする。次の表は，中国語の初級教科書にはどれにでも掲載されている，音節の構造を図解した表である。

声　母	韻　　母			
(語頭子音)	介母音	主母音	尾　音	声　調
		i		yī　　衣
t		i		tì　　替
t	i	a	o	tiáo　条
t		a	i	tài　太

表1　音節の構造

この表を基に，中国語の音節の特徴について少し説明をしておこう。

１．中国語の音節は「声母＋韻母」の整然とした体系を持っている。

2．子音連続がない。

3．母音は単母音であっても一定の長さをもっている。

4．中国語は声調言語である。どの音節にも声調があり，声調は意味弁別の機能を有している。その声調は母音にかぶさっている。

5．中国語は母音だけで音節を形成する。子音だけで音節を形成することはない。

意味はもちろん音節全体にかかっており，意味弁別には母音と子音と声調がともに関係しているが，一音節一義で子音連続がないこと，および発音時間に占める比重や声調を担っていることなどから，母音の方がより大きく拘っていることが理解できよう。母音があいまいなために意味が通じないことは，実際に文章を音読している時や，会話を交わしている時に起っている現象である。子音優勢の言語であるアラビア語等とは対照的に，中国語は母音優勢の言語である。王力によって指摘された中国語の母音優勢は，音声上の現象に止まるものではない。音声言語の意味内容の理解という点からも，母音の役割は子音や声調よりも一つ高い位置にあるのである。音節における母音の重要性が理解できよう。

それに，中国語の子音には，有気音と無気音の区別やそり舌音など，初期の段階を通り過ぎても，聴き取るにも，発音をするにも，かなり神経を集中しなければならない音も少なからずあり，先に子音を学習すると，音節は子音から始まっているので，母音の練習の時にも，先ず子音に気をとられ，母音に神経がいかなくなる傾向も往々にしてある。また実際に中級および上級段階の学習者の発音で聴き取り難いのは，母音のあいまいさに起因するものが多い。母音があいまいであれば，声調もあいまいである。口を大きく動かし，明確な母音が発音できるようになれば，声調もはっきりする。中国語は先ず母音をはっきりと発音できるようにするのが，発音習得の第一歩でありカギである。中国語の音声的特徴および発音の習得情況から見れば，中国語は母音の練習から始めるのが理にも実際にも適っていることが解るであろう。

発音教育の導入の手順については，今一つ声調について言及しておく必要があろう。現在日本で出版されている初級用の教科書は，そのほとんど全てが声調から入っているからである。これは中国語の教科書が増え始めた1980年代に始まった現象である。おそらく中国語は声調言語であり，声調が意味弁別の重要な役割を担っており，かつ難しいから，というのがその理由であろう。80年代以降の教科書には，発音についての説明だけでなく，発音練習を設けた教科書が漸次増えている。これは，中国の改革開放政策の進展に伴って中国に関する情報も増え，日本における中国語学習者が増加していった背景と連動した現象とも言える。原因はいずれにしろ，日中双方の専門家の声に耳を傾けてみよう。

関門は４つ

はじめ「四声」に泣かされて，つぎに悩むは「無気・有気」，それより苦労の「そり舌音」，最難関は「２種の“ん”」[3)]

外国人が中国語を学ぶに当たって，発音でいちばん難しいのは四声，次に声母，次に韻母である[4)]。

しかし，考えてみれば，発音の教育・練習をいちばん「難しい」声調から始めるのは，学習者の精神的負担をいたずらに増やすだけであることに誰も気が付いていないのは，不思議な現象と言わざるを得ない。声調の難しさはどこにあるのか，それを確認しないままに，不十分な経験から難しいと思い込んで教育を進めるだけでは，却って学習者の困難を大きくするだけで，何の解決にもならない。

声調は音の高さの変化である。これは強弱同様，モノマネでできることで，発音の原理とは関係がない。モノマネだけで十分正しい声調を発することは，中国語を知らないこどもでもできることである。ちょうど英語を全く解さなくても，英語の歌をハミングでできるのと同じである。声調を

難しいと感じるのは，声調を十分習得していない段階で，声調記号を見ただけでは，すぐにはその調子を思い出せないとか，2声が上がりきらないとか，4声が十分に下がらないとか，2声と4声を間違える，といった類のことで，声調自体の難しさではない。加えて声調の呼称を「右上がり」とか，「右下がり」のような音の高低の変化を直接言い表す言い方ではなく，第1声とか第2声のような数字という間接的、抽象的な言い方で示せば，数字と声調が反射的に結び付くようになるには，相当期間の練習が必要であるから，数字で高低変化の調子を思い出すのはなおさら難しい。それで益々声調の難しさを強調するようになる。いわば悪循環である。そんな訳で，声調を先に教えると，母音や子音の練習の時に，声調にも気をとられるので，ウーン、ウーンと唸るだけで，発音自体ができない場合も決して珍しくないという，笑うに笑えない実際に教育現場で起こっている現象である。発音教育を声調から入るのは，発音を効率よく練習習得するという点からは却ってマイナスに働くのである。声調が難しいからといって，最初期の段階でむやみに声調を集中的に練習をするのは，むしろ弊害がある。教師に求められるのは，難しい点を正しく認識し，それをなるべく軽減する方向で教育指導に活かすことである。同じ時間を費やすならば，口の形や発音場所を習得しなければならない母音や子音の練習に費やすのが実質的であろう。声調は音節や単語単位で直接声調記号と結びつく形で練習し，早くパターンに慣れるのが，無意味なエネルギーを使うことなく効率的である。そしてある程度声調のパターンが身に付いてから，声調について説明をし，理解と自覚の上に立って声調練習をすれば，すでに実践していたことについて知的発見を伴いながら練習できるので，発音に関する興味も強くなるし，無理がなく実質的でもあるし建設的でもある。

中国の対留学生中国語教育について一言付け加えておこう。中国ではもちろん中国語で説明がなされる。したがって初心者は何をどう説明されているか解らない。筆者が視察した数大学の初級クラスの発音段階の授業では，早口（普通の速さ）で説明がなされた後，教師の後について2、3回

練習をするだけであるから，日本での授業に比べれば，発音練習は皆無に近いと言っても決して過言ではない。ただ語学留学は，現地であることに加えて，中国語の学習に専念できる環境にあるから，課外で中国人学生との交換学習をして上達しているのである。だから外国語学部や文学部以外の学部における中国語教育は，インテンシブ教育と言えども，現地教育の実際は日本ではあまり参考にはならないのである。

発音教育については今一つ重要なことがある。それは耳を先にし，目を後にすること。実際の音声を先に耳から入れ，原理説明をあとにすることである。この順序は，学習者に無理なく実際の音声とその原理を理解・習得させる上で有用である。

４．発音教育の実際

４・１．母音の原理

母音を形成する条件は，次の2点である。

イ．口の形

ロ．舌の位置

口の形とは，口の開き具合、口の引き具合、口の丸め具合などである。舌の位置とは，舌尖、舌面、舌根など，舌のどの部分がどの高さにあるかがポイントとされている。

４・２．母音の種類

中国語の母音は，教学上の分類として次の４種ある。

イ．単母音

ロ．二重母音

ハ．三重母音

ニ．鼻母音

単母音に対して，二重母音と三重母音をまとめて複母音としてもよいが，

説明と練習をする場合の便宜を考慮すると，分けた方が解りやすい。これは教育学習上の便宜的な分類である。

6つの単母音は，ピンインつづりおよび複母音の発音の実態との関係で，2つのグループに分けた方が解りやすくてよい。このグループ分けは，二重母音と鼻母音にも当てはまる。三重母音はすべて（ロ）のグループになる。

単母音

（イ）：a　o　e

（ロ）：-i　-u　-ü　-は子音を伴う時のつづりであることを示す

→yi　wu　yu　→は子音を伴わない時のつづりであることを示す

二重母音

（イ）：ai　ei　ao　ou

（ロ）：-ia　-ie　-ua　-uo　-üe

→ya　ye　wa　wo　yue

三重母音

（ロ）：-iao　-iou　-uai　-uei

→yao　you　wai　wei

鼻母音

（イ）：an　en　ang　eng　ong

（ロ）：-ian　-in　-iang　-ing　-iong

→yan　yin　yang　ying　yong

-uan　-uen　-uang　-ueng

→wan　wen　wang　weng

-üan　-ün

→yuan　yun

つまり複母音と鼻母音は，単母音の（ロ）のグループで始まる音節が（ロ）のグループに分類される。ちなみに，（ロ）のグループのつづりを「y」と「w」で始めるのは，ピンインつづりにおける音節の切れ目を視覚的に

解りやすくするための措置である。

こうして見ると，一見複雑そうに思えたつづりの変更も，規則正しく簡単であることが解る。ところがこのように処理をしている教科書は，意外と見当たらない[5)]。声調記号を付けるのは母音字の上であるが，その位置との関係でも，二つのグループに分けるのは教学上意味がある。

４・３．母音の練習

それでは発音説明と練習に入ることにする。

単母音

a　o　e　i　u　ü

母音の原理を理解、認識するには，先ず口の形は違うが日本人の耳には同じ音に聞こえる「ウ」と「u」の比較から入るのが，最も解りやすいであろう。

最初に，日本語の「ウ」と中国語の「u」を粒読み式に交互に数回繰り返す。

ウ：u　　ウ：u　　ウ：u

この段階では，ほとんどの学生は「ウ」と「u」を同じ音として聞く。

次に日本語の「ウ」をのばしながら徐々に口を丸めて中国語の「u」に移っていく。これを数回繰り返す。

ウ ――― u　　ウ ――― u　　ウ ――― u

次にその逆の中国語から日本語への移行をする。

u ――― ウ　　u ――― ウ　　u ――― ウ

次に日本語→中国語→日本語→中国語をゆっくり繰り返す。

ウ ――― u ――― ウ ――― u ――― ウ ――― u

この段階では，全ての学生が両者を聞き分けることができるようになっている。そこで、日本語の「ウ」は唇を丸めない平唇音（非円唇音）であり，中国語の「u」は唇を丸める円唇音であると説明板書する。

ウ 平唇音（非円唇音）
u 円唇音

これで母音の形成に口の形が大きく関っていることが，はっきりと理解、認識できる。

次に舌の位置である。これは日本語の「エ」と中国語の「e」の比較が解りやすい。

先ず，日本語の「エ」を「エ――」とのばしながら，口の形はそのままに固定してゆっくり「オ」と言う。

エ ――― オ　　エ ――― オ　　エ ――― オ

発音が「エ」から「オ」に移行する時に舌が動いているのを感知することができる。口の形を「エ」にしたまま「オ」と発音すれば，それが中国語の「e」の音である。これで母音の形成に舌の位置が関わっていることが理解、認識できる。

母音　口の形
　　舌の位置

母音を形作るのは，口の形と舌の位置である。授業ではこの2点を意識しながら練習をするクセをつけるように指導をし練習をする。

母音の形成に舌が関わっていることを十分に認識するために，ここで日本語を用いて舌の動きを感知できるように，舌の運動を確認しておくのがよい。口を半開きにしたまま，口を動かさずに「イ、エ、ア、オ、ウ」をゆっくりのばしながら言う。

イ ――― エ ――― ア ――― オ ――― ウ

舌尖がだんだんと下に下がり，「オ」から舌根が上に上がるのが感知できる。発音の説明指導は，耳で聞く音を，自分の身体で感知し，目で見えるように感じるようにするのがコツである。母音のこの口の形や舌の動きを，絵図やＤＶＤを用いて解りやすく動画で解説する教材が増えている。しかし，絵や動画を見ても，その時は解ったようなつもりでいても，目で見るだけでは舌の動きはもちろん，口の形さえ十分に認識・習得することはできない。“ｅ”や“ü”はもちろん，最も簡単であるはずの“ａ”でさえ横から指摘を受けて初めて気が付くことも少なくないのである。絵図や動画は発音の原理を理解するには有用である。しかし実際に発音を身に付けるには，絵図や動画を見なくても，学生が自分で理解、自覚、認識し，口の動きを感知できるように指導をするのが語学教師である。

母音の原理が，口の形と舌の位置であることが理解できれば，発音練習とは，日本語ではあまり使用しない口の筋肉を自由に使えるように運動させ，正しい口の形と舌の位置を感知できるようにすることであると解る。発音の基礎造りは，発声と口の形と舌の位置である。とすれば，発音練習は，ゆっくり、はっきり、大きな声でするのが効果的であろう。口の動きも小さく，早いスピードで発音すれば，使用する筋肉も少なく，日本語の筋肉運動で代用し，口の形や舌の位置を正しく認識することはできない。音読練習に際して，ネイティブスピーカーはそんなにゆっくり話さないか

ら，もっと早く読むようにすべきだ，という見解もあるが，発音練習とは何か，発音習得とは何かが，正しく理解できていれば，そのような指摘が間違いであることが了解できるであろう。発音練習とは，日本語の筋肉運動を中国語の筋肉運動に移動、変更、定着させることであり，日本語では使用しない筋肉を十分ほぐし，中国語の発音で自由に筋肉が運動できるようにすることであり，正しい口の形と舌の位置を自覚認識できるようにすることである。丁度スポーツ選手が正しいフォームを覚えるのと同じで，ゴルフで言えば，正しい手足の位置や身体の姿勢を覚えるまで，コーチの指示にしたがって，ゆっくり何度もフォームを確認しながらクラブを振るのと同じである。ゆっくり大きく口を動かし，ゆっくり、はっきり，大きな声を出すことが，如何に発音練習の基本に適っているかが理解できよう。少なくとも最初の1年間はそうすべきであり，中級、上級段階でも，限定的にはこの練習方法が欠かせない。ネイティブスピーカーと同じように発音できるようにと，口の動きも習得していない段階で，慌てて早く読む練習をするのは，中国の故事にある「揠苗助長（抜苗助長）」[6]のそしりを逃れ得ないであろう。

母音の原理がつかめたら，日本人にとって最も難しい母音の一つとして，最初期に苦労をする“ü”も，ちょうど異なる登山口から登っても同じ頂上に到達できるように，正しい発音ができる口の構え（口の形と舌の位置）を覚えるには，そこに到達できる比較的やさしい二通りの方法があることが解る。

1．先ず日本語で「イ――」と言いながら，唇を丸めて「u」と言う。
2．先ず中国語で「u――」と言いながら，口の形を固定したまま，舌を前に出しながら「i」と言う。

いずれも「ü」の音に到達する。自分のやりやすい方でやればよい。双方を繰り返せば，口の動きと舌の動きを認識できる練習にもなる。単母音の難関と思われている「ü」は，意外と難しくないことが了解できよう。問題は，こうして覚えた口の形と舌の位置を習慣化し，定着させることで

ある。慣れたと思ってちょっと油断をすると，途端に日本語の発音になるのが，発音の世界である。中国語の発音は，上級段階になっても，卒業をして仕事で毎日中国語を使用している環境の中にあっても，常に自覚をし認識をしていなければ，知らないうちに崩れてしまうもろさがある。

すべては最初が大事である。最初の授業は，中国語に対する興味や学習意欲が起こるように工夫をしなければならない。それには解りやすくて身近な題材に新鮮な知的驚きを感じる内容が適していよう。日本語の「ウ」と中国語の“ｕ”で口の形を比較し，「エ」と“ｅ”の比較で舌の動きを理解し，その原理を理解すれば，日本人には難しい口の形と舌の位置の組み合わせである“ü”もそんなに難しくないことを体験できるようにもっていくのは，この条件に適っているであろう。発音の成り立ちの原理を解りやすく説明し，練習をし，興味が出るようにすれば，応用力に発展する基礎力を養成するというインテンシブ教育の方針にも沿った授業になる。

４・４ 二重母音

二重母音は，「強」と「弱」の組み合せに二通りある。ポイントは「弱＋強」の組み合せの「弱」音である。

（イ）強＋弱　ａｉ　ｅｉ　ａｏ　ｏｕ

（ロ）弱＋強　ｉａ　ｉｅ　ｕａ　ｕｏ　üｅ

「強」の部分は強くかつ長く発音する。したがって（イ）のグループの「弱」音はあいまいになるが，（ロ）のグループの「弱」音，特に前に子音を伴う時の「弱」の介音を「軽くかつはっきり」と発音することがポイントである。たとえば“ｊｉａ”は「チィア」であるが，日本人は往々にして「チャ」になる。この介音もちょっと油断をするとすぐに崩れる発音の一つである。

次に重要なのは，前に付く子音によって介音にあいまいさが出てくるものがあることである。それは“ｕａ”である。

“ｕａ”は前に“ｈ”がくると“ｏａ”に近くなるし，同様の現象は三

重母音と鼻母音にもある。だからこの点については，あまり最初の段階から説明をすると，学生にとっては複雑で負担が重くなるので，モノマネ練習だけに止めておき，発音全体に慣れ，習得状況を見計らって，適当な時機に一歩進んだ説明をして認識させるのが適切であろう。必要なことであっても，学生の習得度が不十分であったり，一定の理解段階に達していなければ興味が湧かないばかりか，複雑さに耐えかねて学習意欲を失うという逆効果を生むことにもなりかねない。むしろ学生が疑問を抱くようになってから説明をしても遅くはないのである。学生にとってはその方が却ってより興味を持って納得できるであろう。これは文法説明にも言えることである。教学上配慮すべきことは，正確な説明を無理なく理解、習得させるために，学生の習得情況に沿った形で進めることである。

中国語は発音の難しい言語である。そのような言語にあって教育上注意すべきことは，正しい発音の説明と，学生に与える負担と，正しい発音を練習々得する手順である。学生の反応を見ながら，この三者をどのようにバランスをとって授業を進めるか。これも語学教師としての大切な課題である。

二重母音のポイントとして注意点を整理すると，3点になる。

1．「強」の音を強く長く発音する。

2．介音は「軽くかつはっきりと」発音する。

3．“ｈｕａ”は“ｈｏａ”に近く発音する。

4・5 三重母音

三重母音は全て（ロ）のグループである。

（ロ）－ｕａｉ　－ｕ（ｅ）ｉ　－ｉａｏ　－ｉ（ｏ）ｕ

ｗａｉ　ｗｅｉ　ｙａｏ　ｙｏｕ

注意すべき点は，発音面が4点と，つづりの面が1点である。

1．二重母音同様，介音は「軽くかつはっきり」と発音する。

2．“ｕａｉ”も二重母音と同じく，子音“ｈ”を伴う場合は，“ｈｏ

ａｉ”に近く発音する。

３．“ｕｅｉ”と“ｉｏｕ”は，第一声と第二声では主母音が抑えられるが，第三声と第四声ではかなりはっきりと発音される。これは第三声は主母音の部分がちょうど「低」のところに当たるため，緊張が緩むからであり，第四声は高から低へと緊張が緩む方向に母音が移行するからである。

４．二重母音の“ｕａ”同様，“-ｉｕ”および“-ｕｉ”もまた，前にくる子音が“ｎ”“ｌ”および“ｇ”“ｋ”“ｈ”の時は，“ｉ”“ｕ”が少しあいまいになる。

５．つづり上注意をするのは“ｕｅｉ”と“ｉｏｕ”である。子音を伴う場合には主母音は省略される。

ｔｕｉ　ｊｉｕ

複母音は，上述の注意点を押えておけば発音自体はそんなに難しくはない。練習も発音編全体を通してメリハリをつけるために，一通りざっと通すだけでよい。発音上の注意点をまとめておこう。

１．複母音の“ｅ”は“ε”である。

２．介音は，軽くかつはっきりと発音する。

３．ｈｕａ、ｈｕａｉ、ｈｕｉの“ｕ”は，それぞれ“ｏ”に近く発音する。

４．ｎｉｕ、ｌｉｕおよびｇｕｉ、ｋｕｉ、ｈｕｉの介音“ｉ”“ｕ”はあいまいになる。

５．ｉｏｕ、ｕｅｉは第三声、第四声の時は，主母音がはっきり出る。

４・６ 鼻母音

鼻母音は，日本人には最も区別のつきにくい「ｎ」と「ｎｇ」の対立関係である。しかし糸口はある。“ｎ”と“ｎｇ”は，日本語にも存在する。ただ日本語では両者の違いによる意味の違いはない。つまり意味弁別には関与していない。だから我々日本人は，その違いを意識していないから“ｎ”

も“ｎｇ”も同じ「ン」音に聞こえるのである。このような音は，日本語の“ｎ”と“ｎｇ”を使用して，先ずその原理を理解した上で，耳に馴染むまで録音を聴いて，その違いがはっきりと認識できるようにすることである。録音を聴くと口の中が見えてくるようになれば，その時は正しい発音ができるようになっており，鼻母音はマスターしたことになる。それだけ原理の理解は基本的で，発音習得の前提となるものとして重要であり，原理の理解と，発音器官の動きが一体となるように練習するのが，発音練習のコツである。鼻母音に限らず，実際の発音と，発音器官の動きが脳裏で反射的に結び付くようにする練習が，効果的で正しい発音習得の方法である。発音の指導と練習において，ゆっくりと声を出すことが如何に効果的であるか，これからも理解できるであろう。

鼻母音も（イ）と（ロ）のグループに分けた方が解りやすい。

（イ）ａｎ　ｅｎ　ａｎｇ　ｅｎｇ　-ｏｎｇ

（ロ）-ｉａｎ　-ｉｎ　-ｉａｎｇ　-ｉｎｇ　-ｉｏｎｇ

-ｕａｎ　-ｕｅｎ　-ｕａｎｇ　-ｕｅｎｇ

-üａｎ　-üｎ

これは日本語の“ｎ”と“ｎｇ”を利用して理解、練習すれば理解しやすくかつ習得もしやすい。また日本語を利用すれば，両者の違いを学生が自ら発見できるように指導することができる。発音の原理を学生が自ら気が付くように導く方が，習得も早く確実である。そこで学生に次の二つの単語をゆっくりと発音させ，「ン」の時に発音器官のどこがどう違うのか問いかける。

アンナイ（案内）

アンガイ（案外）

こうするとほとんどの学生が，「アンナイ」の「ン」の時は，舌先が歯茎に付いているが，「アンガイ」の「ン」の時はそうではないことを自分で発見する。そして“ｎ”の時の「ン」と“ｎｇ”の時の「ン」の音の響きの違いが，耳で聴いて解るようにゆっくり発音をすれば，数回繰り返し

ているうちに解るようになる。この違いを先ず耳で定着するようにするためには，とにかく焦らずにゆっくり発音することである。

“ｎ”、“ｎｇ”は上掲の表（p.37）からも解るように，音節の種類が多いので、初心者には一覧表を見ただけで大きな圧力になる。全部を同じように時間をかけて練習すれば，おそらくそれだけで中国語を諦める者も少なくないであろう。いちばん難しい音を含んだ音節がいちばん多いという，これほど教師泣かせ，学生泣かせの言語もないかも知れない。発音教育から入る外国語教育。発音の難しい中国語。その最初期に訪れる関門を如何に乗り越えるか。好むと好まざるに拘らず，中国語教師に課せられた大きな課題である。そこで“ｎ”と“ｎｇ”に関しては，次の二組の音節で徹底的に練習をし，耳と口の両方で両者の違いをはっきりと区別できるようにし，他の音節は軽く流す程度にしておき，発音全体に慣れるにしたがって少しづつ細かく説明指導するようにすれば，学生の前に立ちはだかる厚くて高い壁も，思ったほどには抵抗感を感じなくてもすむであろう。教師として常に心がけるべきことは，学生が難しいと感じないように，負担を感じないように，理解しやすいように，自分で学習できるように，確実に習得できるように教育指導することである。

ａｎ ── ａｎｇ
ｉｎ ── ｉｎｇ

この時には，すでに“ｎ”と“ｎｇ”の違いははっきりと解るようになっているから，“ｎ”と“ｎｇ”によってそれぞれ影響を受けて，母音“ａ”と“ｉ”にも違いがあることを説明しておくのがよい。

“ｎ”の時の“ａ”は前よりで明るい“ａ”であり，“ｎｇ”の時の“ａ”は後ろよりで暗い“ａ”である。ゆっくり“ａｎ”と“ａｎｇ”を発音し，“ａ”の違いをはっきりと聴いて解るようにする。

“ｉ”も“ｎ”の時は明るく細い感じで，“ｎｇ”の時は太い感じである。

ちょうど英語の“ｉ”が，アクセントのある時とない時では緊張度と明確度において違いがあるのに似ている。

あとは母音が同じつづりで明確に音の違う次のペアを簡単にすます。

ｉａｎ　　ｉａｎｇ

ｅｎ　　ｅｎｇ

“ｉａｎ”は発音自体は難しくはないが，そのつづりに引きずられて，誰しもいつまで経っても「イヤン」と発音するのが常である。それでこれは音節表を用いて，子音を伴ったすべての音節で練習をしておく必要がある。しかし，それでも情況はほとんど変わらないのである。その他に“ｉｎ”と“ｉｎｇ”よりも区別のし難い“ｅｎｇ”と“ｏｎｇ”の違い[7]にも注意しておくべきであろう。

最初に注意すべき点は以上に止めておいて差し支えない。発音習得は，先ず耳を慣らし，発音器官の動きを覚え，口を慣らさなければならない。これ以上の詳しい説明は，却って消化はおろか，理解さえも混乱を招くことになりかねない。

「声母＋韻母」という単純明快で整然とした音節構造を持つ中国語は，音節という最も単純で閉ざされた体系の単位の発音さえ，段階を追った説明と練習が必要な言語である。

４・７．子音の原理と練習

子音を形成する原理は次の2点である。

イ．発音場所

ロ．発音方法

一覧表で示しておこう。これもほとんどの教科書が掲載している声母表である。

方法／場所	破裂音		破擦音		鼻　音	摩擦音	側面音
	無気音	有気音	無気音	有気音			
両親音	b	p			m		
唇歯音						f	
舌尖音	d	t			n		l
舌根音	g	k				h	
舌面音			j	q		x	
そり舌音			z h	c h		s h, r	
舌歯音			z	c		s	

子音も母音同様，日本語との比較が解りやすい。先ず，発音場所であるが，これは発音器官を2ヵ所使う。日本語の「フ」と英語の「ｆ」の比較から入るのがよいであろう。

フ：上下の唇を狭めて声を出さずに「フ―」と言えば，日本語子音の「フ」である。

ｆ：上の歯を下唇に軽くつけて声を出さずに「フ―」と言えば，英語子音の「ｆ」である。

日本語の「フ」は上下の唇を狭めて摩擦させる両唇音であり，英語の「ｆ」は上の歯と下唇を接触して摩擦させる唇歯音である。日本語の「フ」と英語の「ｆ」の違いは，発音場所の違いである。中国語の「ｆ」は，英語と同じ唇歯音である。

次に発音方法であるが，これには日本語の発音場所が同じ「マ」と「パ」を用いる。解りやすくするために，母音を伴った音で説明をする。ゆっくり「マ」と「パ」を繰り返し発音し，その違いを認識させる。

マ：唇を閉じたまま鼻から声を出し，「ア」と言えば「マ」になる。

パ：唇を閉じて息をため，呼気で唇を破裂させて「ア」と言えば「パ」になる。

これで「マ」と「パ」の違いが理解できる。唇を閉じたまま声をだすのは

「m」の音で，声が鼻から出ているので，これは鼻音である。唇を閉じて息をため，パッと唇を破裂させて出すのは「p」の音で破裂音[8]である。「m」と「p」はどちらも両方の唇を使う両唇音である。つまり発音場所は同じである。しかし発音方法に違いがある。こうして子音が発音場所と発音方法から形成されることが理解できる。

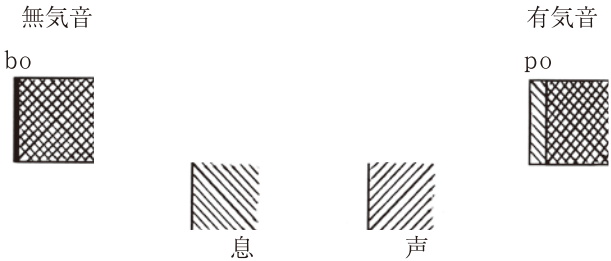
子音　発音場所
　　発音方法

子音は，上掲の一覧表を用いて，個々の子音の発音場所と発音方法を説明すれば理解習得しやすい。横の列は発音場所が同じ音であり，縦の列は発音方法が同じ音であることに一言言及すれば，発音練習もしやすくなる。声母表は，子音の原理を理解する上でも，発音練習をする上でも大変便利な表である。この声母表を掲載していない教科書も少なくないが，著者は教学的視点からもっと建設的に考えるべきであろう。

中国語の子音のポイントは3点ある。発音方法の微妙に違う無気音と有気音の区別，発音場所が安定しにくいそり舌音，それと日本人には発音場所が難しく摩擦の強い「h」音である。

無気音と有気音については，口の前に紙を垂らして，息を強く出すと紙が揺れ，弱いと揺れない，と言って目に見える形での説明が一般的である。しかし音の正しい理解をするためには，模倣練習だけでなく，子音の原理を説明するのが筋であり解りやすい。子音は摩擦音を除き，瞬間音が多いので，普通は母音を伴った形でないと，聴いても解らない。説明も母音を伴った音でした方が説明しやすい。

無気音と有気音の違いを図で示しておこう。



そり舌音は，日本人にとっては極めて難しい子音である。日本語にはない舌尖と硬口蓋という発音場所の組み合せがポイントである。「舌をそらして」という説明が普通であるが，考えてみればどの程度そらせばよいのか，あいまいでよく解らない。「舌を巻く」という言い方に至ってはなおさらである。子音であるから，やはり発音場所が特定できる説明をすべきあろう。

先ず日本語の「タ」を言わせ，舌尖が歯茎に触れていることを確認する。次に同じく日本語の「ラ」を言わせ，舌尖よりも上の方，つまり舌面が歯茎よりも上の方，つまり硬口蓋に触れていることを確かめさせる。

タ：ラ　　タ：ラ

舌の動きを感知しながらこれをゆっくり繰り返して，どことどこが接触しているかを十分認識させる。そして「ラ」で舌面が触れる硬口蓋よりも少し上のところに舌尖を付ける，つまり舌を「立てて」[9]「チ」と言えば，これがそり舌音の“ｚｈ”である。“ｚｈ”と“ｃｈ”は無気音と有気音の違いである。次に舌を硬口蓋より少し離して隙間をつくり，その隙間を摩擦させて「シ」と言えば“ｓｈ”の音であり，「リ」と言えば“ｒ”の音である。そり舌音のポイントは，確実に発音場所が確認できるように説明指導することである。

「ｈ」音の難しい点は，摩擦をする場所が軟口蓋というノドの奥であることと，摩擦が強いことである。摩擦の場所を知るには「ｋ」音で説明をするのが便利である。日本人なら誰にでも経験がある食事の時の例を出せ

ばよい。つまり魚の骨がノドに刺さった時にとっさにどうするか。ノドの奥を強く「クッ」と言うであろう。これが「ｋ」音であるが，その時にノドの奥に息をためて破裂をさせる。その息をためたところ，そこが軟口蓋であり，そこを摩擦するのが「ｈ」音である。横の列は発音場所が同じであるから，「ｇ」「ｋ」「ｈ」を順に発音し，その時に同じ場所に息の引っ掛かりを感じればよい。こうすれば発音場所である摩擦をするところを確実に覚えることができる。摩擦する場所と強さを覚えるには，“ｈｅ”の後で常用語句“hěn　hǎo”（很好）を用いるのがよい。日本人の発音は摩擦がほとんど聞こえないくらい弱い。“hěn”は母音“ｅ”というより，日本語の「エ」に影響されて，知らず知らずのうちに摩擦の場所が前よりになりがちである。ノドの奥のほうをしっかりと摩擦をするように丁寧な練習が必要である。そして“ｈｅ”を練習し，その後で日本人がいちばん間違えやすい“ｈｕ”をする。“ｈｕ”は日本語の「フ」，つまり両唇摩擦音になりやすい。しっかりとノドの奥を摩擦しながら「ウ」よりもやや「オ」に近く発音すれば“ｈｕ”になる。“ｈｅ”と“ｈｕ”を繰り返すことによって摩擦をする場所が確認できる。

このように，母音にしろ，子音にしろ，発音の原理のわずかな違いで，グッと中国語らしい音が響いてくるのである。丁度ペン習字で，点の位置や線の位置を半ミリ移動させるだけで字が見違えるほどきれいになるのと同じである。一字一字の違いは少なくても，文章全体になると，秩序よく美しくバランスのとれた文字文章となる。発音も正しい発音で会話をしたり音読をすれば，会話や文章全体が非常に聴きやすく，耳に心地よく響いてくる。実際にこのレベルに到達した学生は過去に何人もいる。

４・８ 声調

声調教育に関しては，誤解を防ぐために，最初に一言述べておかなければならないことがある。それは声調に関しての「説明する」ことと，「練習する」ことをはっきりと区別することである。ここが曖昧なために，学

会などの質疑応答の時に，議論がかみ合わないことが往々にしてある。声調教育に関して筆者が提唱したいことは2点ある。一つは，声調の説明を発音教育全体の中で，どの時点でするかということ。もう一つは，第三声の説明を，全三声を基準とするか，半三声を基準とするかという，この2点である。議論のかみ合わないのは後者である。

中国語は声調言語である。どの音節も声調がかぶさっており，意味を抜きにした音節だけの発音練習と言えども，声調を抜きにしてはできない。意味とは関連付けずに声調には関係なく音節単位の練習であっても，それは第一声で発音しているのである。そして意味と関連付けてみれば，声調は意味弁別の役割を担っている。つまり同形の音節であっても，声調が異なれば意味に違いが生じる。声調は非常に重要な役割を担っているのである。加えて声調は難しいと言われている。学習者がなかなか習得できず，しょっちゅう間違えるからである。

しかし，難しいとは，どのような点を指して言っているのであろうか。それを明確にしておかないと，発音教育における声調の位置付けを誤ることになりかねない。ここが非常に大切な点である。

共通語の声調は4種あり，そのうち第一声、第二声、第四声は音の高低の直線的な変化であり，第三声は低く抑えて上がる屈折変化である。変化自体は極めて単純で，現に声調に関して何も知識がなくても，モデル音声の後につけて正しく発音することは誰にでもできる。だから声調自体は極めて簡単なのである。しかし，モノマネ発音は簡単でも，モデル音声を離れての学習者による単独発音は，不明瞭な声調で発音する者が多い。それは声調の基本パターンが身に付いていないためで，上がり具合や下がり具合が不十分だったり，高さが不安定なのと，文になれば音声の流れが加わるから，音声全体が曖昧になって，正しい声調を発することができなくなる。しかしそれは声調に限らず，母音や子音にも言えることで，単母音の“ｅ”と“ü”，鼻母音“ｎ”と“ｎｇ”の区別，子音の無気音と有気音の区別やそり舌音などは，いつまで経っても習得できない音である。最も

簡単と思われる“ｄａ（大）”の“ａ”ですら，口の開き具合が不十分だからというのではなく，舌の位置が正しい位置でないために，“ａ”には聞こえない音を発する者が珍しくはないのである。それと同じである。ただ声調は四種類しかない上に，どの音節にもかぶさっているから，子音や母音の間違いよりも目立つ，と言うより，文および文章全体にわたって音声上の曖昧な現象が起きているので，耳で聴いて敏感にキャッチできる声調が特に耳について難しいと思われるのである。しかし声調は上述のように，モデル音の後についてなら簡単であるが，子音や母音は全く違う。モデル音の後についてモノマネ発音をしても，どこがどう間違っているのか認識できず，何度も間違えるのが普通である。発音の原理を知らなければならないからである。だから声調よりも子音や母音の方が実は難しいのである。ここを冷静に見ないと，声調に関して過った認識を持つことになり，したがって，発音練習の比重を間違えることになる。発音を教育指導する立場の教師は，発音教育に関する従来の認識や方法を無批判に踏襲するのではなく，発音教育の現場の実体を冷静に観察、分析し，より合理的で効果のある教育指導の方法を考え出し，実験し，構築していかなければならない。それが語学教師に課せられた任務であり，語学教師には，自分の実践経験と研究により，確実に効果的な教育指導方法を生み出す努力が求められるのである。

４・８・１ 第三声について

声調を発音教育の過程でどの段階で説明をしたらよいか，という問題については「4・8」と「3．発音練習の順序について」においてすでに述べたので，ここでは第三声をどう説明するかという問題について述べることにする。

第三声については，音節末尾を最後まで上げる全三声派と，低い部分で終わる半三声派に分れ，半三声派が増えつつある。それは実際の音声による言語生活を営む上で，第三声の音節を半三声で発音する場合が圧倒的に

多いという統計数値による。この点については陳明氏等による詳しい調査研究がある[10)]。この問題については議論をする価値は十分あるのであるが，現在のところ筆者は理論的準備を正直言って持ち合わせていない。それでこれは筆者の個人的見解に止まるものではあるが，全三声で説明をした方が習得しやすいと思われる理由を簡単に述べておく。

イ．第三声の単語を一語文として単独で発する時，音節末尾を上げない場合もある。しかし単独で発する場合の末尾と所謂半三声の末尾では，音声の終始形と後に音節の続く継続形では明確な違いがある。だから統計的に多い継続形の半三声を根拠にすることはできない。加えて半三声の単独発音練習は意味がない。

ロ．第三声に限らず，どの声調も発音練習として単独で発音する時と，一語文として音声を発する時とは，明らかな違いがある。

ハ．“我”、“你”などの常用語は早くも第一課に出現する単語である。“小”、“好”なども早い段階で出てくる単語である。

したがって第三声の場合，

我――我们　　你――你们
小――小事　　好――好书

のように，基本形と変異体という関係で練習をし，認識をさせるのが理解しやすく，習得もしやすいであろう。音声言語が意思疎通の媒体として実際の場面で用いられる道具であるとすれば，一語文はその時の話し手の感情でさまざまなバリエーションがあり得る。したがって，音声の高低の変化を声調という範疇に分類するならば，個々の場面で実際に発せられる音ではなく，それを抽出した音形を以て基本形として策定する必要性がある。そうして初めて声調として分類をする意味がある。語学学習における発音の基礎を身に付けるという練習では，先ずその基本形をモデルとして説明をし発音練習をするのが適切であろう。そして統計的に多い半三声は二音

節語で練習すべきであろう。

４・８・２ 声調練習

さて，声調および声調教育の位置付けが終わったところで，実際の声調教育に入ることにしよう。

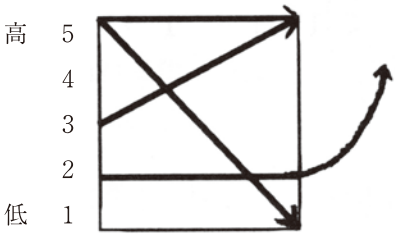
声調とは中国語の高低アクセントである。アクセントには英語にみる強弱アクセントと，日本語にみる高低アクセントの二種ある。単語 present を第一音節を強く読めば名詞になるし，第二音節を強く読めば動詞になる。英語の母語話者が Tokyo(東京) とか，Sasebo(佐世保) と日本語を言う場合，どれかの音節を強く読むのは，母語である英語の影響である。

高低アクセントは，音の高さで意味に違いが生じる。日本語を例にとれば，ハシという単語で「ハ」を高く読めば，食事で使う「箸」であり，「シ」を高く読めば，川にかかっている「橋」である。中国語は日本語同様高低アクセントである。では日本語との違いはどこにあるか。日本語が，ある音節が高く，ある音節が低いという，複数の音節による高低の変化であるのに対し，中国語は「ハ」なら「ハ」，「シ」なら「シ」と一つの音節の内部での高低の変化である。そしてこの音節内部の高低の変化が意味弁別という重要な役割を担っているのである。中国語の音節が，単母音と言えども一定の長さを必要とする理由はここにある。日本語が「メ（目)」、「キ(木)」、「カ（蚊)」など，ごく少数の単語を除いて，「ミミ（耳)」、「アタマ（頭)」、「ヤマ（山)」など複音節の形態素、単語が圧倒的に多いのとは対照的に，中国語は“沙发”（ソファー)、“雷达”（レーダー）など外来語を除いて，ほとんどが一音節で意味を表す形態素音節である理由もここにある。中国語が声調言語であると言われる所以である。

さて，声調で重要な点は2点ある。一つは言うまでもなく，高低変化のパターンである。パターンは四種あるので四声と言う。もう一つは，最初の説明時はともかく，実際の指導ではこれを取り上げる教師は意外と多くないのであるが，第一声の音の高さである。最初に高低変化のパターンを

四声図で見ることにしよう。

１）四声図（イメージ）



数字は音の高さである。5は高く，1は低い。3は我々が普通に話す時の高さであるが，高さは相対的なもので個人により異なる。一般に子供は大人より高く，女性は男性より高い。それぞれ自分の声の高さでよい。

四種類の声調のパターンは次の通りである。解りやすい“ｍａ”で説明練習するのがよい。

第一声：5の高さからそのまま伸ばす。高く平らな調子である。　5→5

最初に普通の高さで「マー」と言って，それを少し高くして「マー」と言えば，高さも認識できる。日本人にとって，この高さが単語や文になると，往々にして維持できずに，低くなる傾向が強い。高いことをしっかりと認識させることが大事である。

第二声：ほぼ2の高さから5へ上げる。右上がりの調子である。　2→5

低く「マ」と言って，すぐに高く「ア」と言う。一音節で「マア」である。

第三声：ほぼ２の高さで押さえぎみに伸ばし，軽く4あたりに上げていく。

低く「マー」と伸ばし，「ア」と少し高く上げる。　2→2→3

第四声：５の高さから一気に1まで下げる。右下がりの調子である。5→1

高いところで「マ」と言って，母音の「ア」と同時に低く落として「マア」。

四声のうち，第三声が他の声調に比べて少し長いことを説明しておく必要があろう。低く押えた部分が，他の声調とほぼ同じ長さになり，高く上げる部分が長くなっている。これは意味がある（後述）。

四声の練習は“ｍａ”ができたからと言って，他の音節でもすぐにできると言う訳ではない。“ｍａ”の第一声が解っても“ｔａ”の第一声が第何声か解らない，ということは決して珍しくない。ましてや“ｘｕｅ”や“ｋａｎ”など声母も韻母も違えばなお更である。それで“ｚｕ”、“ｗｅｉ”、“ｓｈｅｎｇ”、“ｊｉａｎ”など，いろいろな音節を用いて練習をしなければならないのである。母音と子音はすでに学習しているので，どのような音節を用いることもできる。声調を最後にするのは，この意味でも有益である。

２）軽声と声調変化

中国語の声調には，四声の他に，軽声と声調変化という現象があるので，声調は，基本のパターンを説明した後に，二音節の単語でも説明と練習をしなければならない。軽声は，前に来る声調によって高さに違いがある。軽声の説明は，同じ音節が続く親族呼称の単語が解りやすくてよい。

ｍāｍａ	妈妈
ｙéｙｅ	爷爷
ｎǎｉｎａｉ	奶奶
ｂàｂａ	爸爸

声調変化には2種ある。本来の声調が他の声調に変化するのと，本来の声調の一部のみを残す形の2種である。

本来の声調が変化するのに2種ある。一は，声調そのものの変化で，他は語彙に属する変化である。

イ．声調そのものの変化　3声＋3声　→　2声＋3声

この変化は，普遍的なものなので，単語および連語の双方の例を出すべきである。

単語の例　ｘｉ̌ ｚ ǎ ｏ　　ｘ í ｚ ǎ ｏ　洗澡
連語の例　ｎ ǐ ｈ ǎ ｏ　　ｎ í ｈ ǎ ｏ　你好

また，第三声が3回以上続く場合も珍しくないが，最初からあまり全部提示をすると混乱するので，これは本文に出てきたところで説明練習をすればよい。発音編の段階では，基本的なパターンが出ていればよいであろう。

ロ．語彙による変化“不”“一”“七”“八”

・“不”は本来第四声であるが，次に第四声がくる時は第2声に変化する。
・“一”は本来第一声であるが，次に第一声、第二声、第三声がくる時は，第四声に変化し，次に第四声がくる時には第二声に変化する。つまり，“不”と“一”は，声調のパターンが同じであるので，並べて練習すると解りやすい。

bù duō	bù nán	bù xiǎo	bú dà	
不　多	不　难	不　小	不　大	
yì tiān	yì nián	yì qǐ	yí kè	yí ge (gè)
一　天	一　年	一　起	一　刻	一　个

100以上の場合は少し複雑である。

yì bǎi líng yī	yì bǎi	yīshiyī
一　百　零　一（101）	一　百	一十一（111）

なお，序数の場合は変化をしない。

dì yī tiān	dì yī kè
第　一　天	第　一　课

４・８・３ 音の高さ

音の高さについて注意を要するのは，第一声である。第一声については，声調の説明で，ふつうの「3」の高さよりも少し高い「5」の高さであることはすでに説明してあるし，練習もして音節単位ではマスターしている。しかし，単語や文中での発音となると，往々にして第一声は低くなる。それは特に次の声調の組み合せの単語である。

第一声＋第二声	zhongguó	中国
第四声＋第一声	miànbāo	面包
第三声＋第一声	lǎojiā	老家

第二声は低いところから始まるし，第四声は低い時点で終わる。第三声は，半三声の時は，低い時点で第一声に移る。第一声はその影響を受けて，相対的に低くなる傾向がある。第一声を四声図のように少し高く発音するだけで音の響きが一変して，グッと中国語らしくなる。第一声を高く読むことの効果は想像以上である。

これは一見小さなことのようであるが，発音上の日本語と中国語の似て非なる現象は全般にわたるので，発音教育は口を丸める「ｕ」や，軽いけれどもはっきりと発音しなければならない介音のような小さなことの総体であるとも言える。発音が聴きやすくて意味内容が解りやすいのと，聴きづらくて意味を理解するのに一苦労をする違いはここにある。大事なことは，高さや強さなど，ちょっとした違いもキャッチできる耳を養うことである。特に強さに対する耳を養うことは，ニュアンスの違いや，話し手の感情の違いをキャッチできる耳を養うことになるので，コミュニケーション能力を養成することを目的としたインテンシブ教育では重要である。インテンシブ教育のように，明確な目的や目標を設定したプログラム教育においては，このような数値では示すことのできない「成果」はいろいろな面にあって，この点こそ学生の独学が難しく，教師の指導を必要とする分野なのである。

４・8・4 声調記号の位置について

声調記号をどこに書くか，という点についても一言言及をしておいた方がいいであろう。これは簡単である。次の3点である[11)]。

１．母音字の上に書く。

２．主母音の上に書く。

３．三重母音で主母音を省略する場合は，後の母音字の上に書く。

主母音については，32ページの音節構造表を利用すれば解りやすい。

４・9 ｒ化音

ｒ化音については，取り上げていない教科書も少なくない。また取り上げてあっても，音韻の規則とは関係なく，無秩序に並べてあったり，部分的に取り上げてあったり，また典型的な北京語でのｒ化音の単語がずらりと並べてあったりで，教科書としては相応しくないものが少なくない。確かにｒ化音は北方語，特に北京地方で多用される音韻現象であり，南方系の人はｒ化音を出せない人も珍しくない。しかし基本的なものは一通り取り上げておくべきであろう。その理由は次のとおりである。

・ｒ化音は北方で広く用いられている。

・ｒ化音は口語で多用される。

・単語がｒ化することによって品詞が転化するものがある。

・一部の名詞やＡＡ型形容詞の重ね型がｒ化した場合，声調が変化する。

・ｒ化することによって，「小さい」「かわいい」などのニュアンスが付加される。この点同じ名詞接尾辞の「子」を伴った名詞と明瞭な違いがある。

・ｒ化することによって，発音されなくなる韻尾があったり，わたり音が入ってくる音節が多い。

また中国で出版されている中国語辞典には，一定の基準でｒ化音の単語が見出し語として収録されている。その基準はそれぞれ凡例で説明がしてある。代表的な中国語辞典の説明を見よう。

『现代汉语词典』第五版 商务印书馆 2005年 凡例 p.3

2.3 书面上有时儿化有时不儿化，口语里必须儿化的词，自成条目，如【今儿】【小孩儿】。书面上一般不儿化，但口语里一般儿化的，在释义前加“(～儿)” 如【米粒】条。释义不止一项的，如口语里一般都儿化，就把“”放在注音之后，第一义项之前，如【模样】条。(以下略)

『现代汉语规范词典』外语教学与研究出版社 第2版 2010年 注音 p.20

4.根据普通话实际读音，有区别意义作用的儿化音和在普通话语音系统中必须读儿化音的，按儿化标注，并在词条中用缩小的“(儿)”表示。可儿化也可不儿化的，不按儿化音标注，词条中也不加“儿”字。

以上からも解るように，ｒ化音を等閑に付すのは適切ではない。ただｒ化音は実際に教科書の本文で出てきた時に練習をすればよいという見識もある。しかし上述の説明からも解るが，それに加えてｒ化音は音韻変化が規則的であること[12]，音韻変化を伴ったｒ化音の単語が初歩の段階で出てくることなどから，やはり発音編で一通り示しておく必要はある。整理をしてまとめてあれば，後に説明も練習もしやすくなる。ここではインテンシブクラスで使用している教科書から引用をしておく。

１．主母音＋ｒ

（イ） ａ、ｏ、ｅ

nàr	huār	huór	zhèr
那儿	花儿	活儿	这儿

（ハ） ｉ、ｕ、－ｉ

wányìr	xiǎoyúr	zìr	shìr
玩艺儿	小鱼儿	字儿	事儿

２．韻尾＋ｒ

（イ）ｉ、ｎ

xiǎoháir	wánr	yìdiǎnr	wàibianr
小孩儿	玩儿	一点儿	外边儿

（ロ）ｎｇ

xìnfēngr	yǒukòngr	diànyǐngr
信封儿	有空儿	电影

４・10 音節単位の発音練習の意義

中国語は，発音練習の基礎として，音節単位の練習が重要な位置を占める。その理由は5つある。

１．中国語は母音優勢の言語である。母音優勢とは，子音連続がなく音節構造が「声母＋韻母」の整然とした体系を持っていて，複母音はもちろん，単母音においても母音が一定の長さをもっていること。意味弁別の一役を担っている声調は母音にかぶさっていることである。

２．中国語は，一音節一形態素の言語である。つまり，どの音節も意味を持っているので，母音や声調の発音が曖昧になると意味が解り難くなる。

３．中国語は二音節語が圧倒的に多い。そして二音節語のそれぞれの音節は，同音異形態素が極めて多い[13)]。加えて，その形態素は「学習」「大学」、「民間」「人民」など，二音節語の前にも後にもくる自由形態素が多い[14)]。

４．一音節の長さが，単母音、複母音、鼻母音を問わず，ほぼ同じ長さである。これは声調も同じで，第三声は文中では半三声になるので，声調面からみてもほぼ同じ長さになる。

５．日本人には区別がし難く，したがって発音のし難い，無気音と有気音の対立関係、ｎとｎｇの対立関係がある。また発音場所の認識し難いそり舌音がある。

少し説明を加えよう。子音を形成する発音方法はもちろん，発音場所は

2ヵ所を１点として用いるから，単音の違いは明瞭である。発音場所が同じで発音方法が違う「マ」と「パ」、「タ」と「ナ」などは両者の違いがはっきりと区別できる。また発音方法が同じで発音場所の違う「フ」と「ス」、「タ」と「パ」も同様である。発音場所は限定されていて許容範囲もないので，子音形成の条件は極めて狭く限定されている。

これに比し母音は，口の形にしろ，舌の位置にしろ（舌は口腔内のどの発音器官とも接触しない），許容範囲が広い上に，話者が明確に口の形や舌の位置を確認できないので，発音は往々にして大きくズレる可能性が大きい。つまり母音は子音に比べて，はるかに正しい発音を習得し難いのである。中国語はこの母音が一定の長さを持っているのである。複母音は複母音だから長さがあるのではなく，主母音が長いからであり，主母音が長いから単母音も長いのである。そして6つある単母音はすべて主母音となり得る。

英語は一音節の長さがマチマチであり，ＣＶＣの構造を持ち子音連続も多いので，同音異形態素は極めて少ない。日本語は子音連続はなく，音節の長さも感じられないほど短いが，「カタ（肩）」「カマ（鎌）」のように，一形態素の中に子音も母音も音節の数だけ入るので，これも同音異形態素は少ない。

日本語には清音と濁音の違いがあって，日本人にはその違いははっきりと解る。中国語では無気音と有気音がそうであるが，初期には無気音が有気音になりがちで，後になると往々にして有気音が弱くて無気音に聞こえる発音になりがちである。そり舌音も，舌尖ではなく舌面が硬口蓋の少し前よりの位置に当たるのが普通であり，そり舌にはならないのである。

このように見てくると，音声弁別、意味弁別の客観的条件は，中国語が相対的に緩いので，個々の話者にとっては弁別するのが逆に厳しいと言えよう。ここに中国語の発音の難しさがあり，音節単位の練習の必要性と重要性が潜んでいる。

このような難しい発音に学習の最初期に向かわなければならないのであ

るが，それを乗り切る最も有効な方法の一つは，21ある子音と，16ある鼻母音を，反射的にスラスラ言えるまでに暗記させることである。この方法は昨年度から時間を設定する形で本格的に授業で実施し，それが実現している[15)]。それで次に掲げる発音教育のプログラムポリシーに取り入れ，定着を図ることにした。

５．発音教育のプログラムポリシー

それでは最後に，中国語インテンシブプログラムにおける発音習得の目標と練習方法について述べておこう。これは中国語インテンシブプログラムポリシーの一環として，学生に解るように説明をしているものである。

中国語インテンシブプログラムの学習習得目標
技能別学習到達目標

発音の習得目標
　最終到達目標と段階別目標

最終到達目標
・正しい発音で会話ができる
・漢字長文がスラスラ音読できる

目標に掲げた理由
　１．かなり発音を身に付けている学生であっても，文字から離れて中国語を口にする場合，簡単な常用句や単語であっても，声調が不明確であったり，母音や子音が曖昧で聴いても解らない場合が少なくない。教科書などで口慣れしている文ではなく，自分が発する中国語が中国人が聴いて解る正しい発音で話すことができるようになるのが，最終到達目標である。

当り前のことのようであるが，発音が本当に自分のものとして身に付いていなければできない，仕上がり段階のレベルである。

２．中国語の文字漢字は表意文字である。これは非専門課程における教育・学習の最大の障害と言ってもよい。中国で出版されている新聞、雑誌、書籍およびその他各種文書など印刷物はすべて漢字である。漢字の文章が音読できなければ中国語を習得したとは言えないであろう。漢字文がスラスラと音読できるのは，中国語の実力が相応に身に付いている証でもある。音読力習得の最終到達段階である。

表音文字の世界では当たり前のことでも，表意文字の世界では大きな努力を要することがある。また発音は言語によってやさしい言語と難しい言語とがある。中国語は日本人にとって発音が非常に難しい言語である。中国語は私たち日本人にとって，入門期から最終段階まで，二重のハードルが立ち塞がっていると言えよう。

段階別目標

１年生前期　発音の輪郭をつかむ

音節単位の発音

注意点：“ｅ”“ｕ”“ü”。無気音と有気音。そり舌音。“ｈ”音。“ｎ”と“ｎｇ”。“ｉａｎ”。“ｅｎ”と“ｅｎｇ”。

声調。第2声が十分上がるように。半3声の高さ。

単音をグループに分けて，それぞれ時間を設定し，時間内に暗記する

子音　3秒

単母音

複母音

“ｎ”と“ｎｇ”　3秒

単語単位の発音

前期の段階で完全に習得することは難しい。ある程度の安定性をもっ

て発音できればよしとする

発音を聴いて単音節語の声調が正しく書ける

発音を聴いて二音節語の声調の正解率を五割以上とする

音節の発音を聴いてピンが書ける。子音と母音に分割

子音　十割

単母音　十割

複母音　十割

ｎとｎｇ　七割以上

１年生後期　前期の発展と発音段階の完成。

ここで言う完成とは，正しい発音ができるという意味である。発音は，正しい発音ができるようになっても，演習を怠るとすぐに崩れる性質のものである。正しい発音を自分のものとして身に付けるには，以後相当期間にわたる練習が必要である。

音節単位、単語単位の発音の習得

発音を聴いて二音節語の声調が正しく書ける

新しい単語がピンインで正しく発音できる

教科書の漢字文がつかえることなく読める

やさしい文がスラスラ読める

漢字の文章が正しい発音でゆっくり丁寧に読むことができる

漢字の文章が朗読調よりもある程度早く読める

２年生　長文による音読段階による発音の習得

単語の発音の習得　新しい単語が安定感をもって正しい発音で読める

長文の音読

きちんとした発音で正しくゆっくり音読できる

聴いて解る範囲の正しい発音で，かなり早く音読することができる（設定された時間内に読む）

３年生　２年生段階の発展とより安定した習得

きちんとした発音で正しくゆっくり安定感をもって音読できる

聴いて解る範囲の正しい発音で，かなり早くかつゆとりをもって音読することができる（設定された時間内に読む）

この目標はまだ完成はしていない。しかし子音と鼻母音を3秒以内で暗記することは1年生全員が達成しているし，漢字長文の時間内音読はすでに定期試験に取り入れていて時間面の目標は達成している学生はどの学年にもいる。第二期の中期計画を迎えた今年，このような目標を設定できるところまで来たのである。この学習目標はすでに学生に配布してある。これで学生は，発音習得の全体像と現在自分がどの状況にあるかを理解できる。今後はこれを基に教育指導をすれば，その段階における到達状況を学生も教師も把握でき，その時点での発音練習の目標が明確になるであろう。

6　語学教師の資格

中国語インテンシブプログラムの目的、目標は実践運用能力の養成である。中国語教育の目的、目標が実践的である限り，教師もまた理論的説明ができるだけでなく，それ相応の実践技術力とその指導力が求められる。発音に関しては，次の点が教師の条件として求められるであろう。

1）正しい発音ができること。

2）発音の原理を解りやすく説明できること。

3）正しい発音ができるように指導できること。

順を追って説明しよう。正しい発音ができるのは語学教師としては当然である。しかし正しいといってもネイティブスピーカーと同じ発音ができるわけではない。許容範囲内であればよい。ただ許容範囲といっても，それを言葉で定義することはできない。それで次のように説明しておこう。

1）腹から発声をすること。

2）母音がクリアであること。
3）発音の原理を説明したことを実際に発音して示せること。
4）学生の発音を矯正し，正しい発音ができるように指導できること。
5）常に自分の発音に磨きをかけるように自分で意識的に練習をすること。

なかでも「4)」の発音矯正の指導力は大事で，インテンシブ教育全体に影響効果が生じるものである。いままでの経験からすると，中国語の語学力をどの程度習得できるかということは，初級段階，特に前期にどれだけ発音を身に付けたかにかかっている。発音の習得に関しては，日本人教師と中国人教師の連携が非常に重要であるが，幸い近年大きく実を結ぶようになってきたのは喜ばしいことである。今年の1年生に関して言えば，後期になってから新しい単語や会話文などが，ごく短時間で覚えることができるようになるまで力が付いたのである。このことは担当教員さえ予想していなかったことであり，今までの発音重視の教育指導が間違っていなかったことの証左である。またこれからのインテンシブ教育を考える上での大きな要因となる。中国語教育の一番の基礎となり基本となる発音教育は，ほぼ軌道に乗ったと言えそうである。後はこの発音教育を確実に音読教育へと発展させることのできる教育方法を確立することである。

７．おわりに

中国語インテンシブプログラムがスタートしてから今年で７年目，第二期中期計画の初年度である。インテンシブプログラムは目標を掲げているので，その実現が求められる。したがって語学力の各技能の基礎となる発音の習得は，極めて重要である。ましてやインテンシブ教育で求められているのは実践運用能力の養成である。発音を抜きにしてはインテンシブ教育は成り立たない。過去6年間の経験を通して解ったのは，中国語習得の教育・学習において，発音教育が今まで以上に重要であることである。発

音習得が大事であることは学生も解ってはいる。しかしまだ何故大事であるのか，中国語学習の全体像における位置付けが理解できていないために，明確に自覚をするには至っていない。学生に発音練習と発音習得の意義を理解認識させるためには，プログラムのポリシーの策定などを通じて，その意義の説明を解りやすくすると同時に，最終目標や学年ごとの段階別目標を設け，日々の練習方法を提示するのが有益である。こうして発音力が語学力全体の基礎力となり，基盤となるのである。

発音習得に関しては，現在の1年生に今まで以上の効果が見られる。新しい単語や表現を，短時間のうちに音声で記憶できるようになっており，学生自身がそれを自覚しているのである。また教科書を伏せての日本語を音声で中国語に置き換える練習に至っては，新しい課の本文がほぼ全部，授業で学んだ第一回目にして早くも日本語を耳にして即座に中国語で答えが返ってくるまでになっている。これこそ発音習得の賜物以外の何物でもない。発音習得の効果は計り知れないのである。この学年が3年生になった時にある程度の結果が見えてくることが期待されよう。

中級以上の教材はまだ流動的で，なかなか理想的な教材作成ができないでいる。目標を持つということは，それだけ教材が工夫され洗練されたものでなくてはならない。第二期に入って，中国語インテンシブプログラムは新たな課題が出てきたと言える。問題を一つ一つクリアしながら，レベルアップのための新たな課題を更に乗り越えるためには，我々担当者が今までの経験を活かし，指導能力の向上を目指した日々の研修と研鑽をする必要があろう。中国語インテンシブプログラムの未来に，微かな光が見えてきたことも事実である。この光が大きくはっきりとなるように努力をするのが担当者に与えられた課題であると言える。

注）

1）拙著「音節構造、形態素、文字」―中国文字改革の行方―『長崎県立国際経済大学論集』第23巻第2号 平成元年11月

2）拙著「中国語における発音教育と古典の解釈」―李白『客中作』と『山中与幽人対酌』を題材として―『長崎県立大学論集』第40巻第4号 平成19年3月

3）『中国語の発音』日下恒夫著　アルク　2007年　p.11

4）『对外汉语教学概论』赵金铭主编 商务印书馆　2010年 p.366

长期以来，对外汉语教学界十分重视汉外语音系统的比较研究，取得了相当丰富的成果。比如说，通过比较我们看到，外国学习者在汉语语音方面的困难，一般来说，首先是声调，其次是声母，再次是韵母。

5）教科書によっては数か所に分けて個別に説明がなされているが，規則性については言及されてない。

6）『孟子・公孫丑章句上』宋人有閔其苗之不長而揠之者，芒芒然帰，謂其人曰，今日病矣，予助苗長矣，其子趨而往視之，苗則槁矣，天下之不助苗長者寡矣，以為無益而舍之者，不耘苗者也，助之長者揠苗者也，非徒無益，而又害之。

7）久留米大学の李偉准教授によれば，発音テストの結果，inとingの区別よりもengとongの区別の方が正解率は低かったそうである。「初級中国語におけるe－learning小テストの応用」（日本中国語学会九州支部例会2011年12月）

8）破裂音は，最近では閉鎖音の呼称を用いる教科書が多い。しかし“map”や“look”のように，母音の後にくる場合と違い，中国語はすべて発音器官を閉鎖の状態から破裂させることによって発する音の語頭子音であるから，破裂音の呼称が適切であろう。

9）舌を「立てる」という言い方は，慶谷壽信長崎外国語大学教授（当時）のご教示による。

10）「第三声的性质及其教学」陈明远、朱竹、刘骥（『对外汉语教学论文选』1983年中国教育学会对外汉语教学研究会）所収

11）声調記号を付す位置については，かなり以前からであるが，次のような説明をしている教科書が増えつつある。

“ａ”がある時は“ａ”の上。

“ａ”がない時は“ｏ”か“ｅ”の上。

“ｉ”と“ｕ”が並んでいる時は後に。

しかしこれは便宜的な覚え方であって原理的な説明ではない。学校教育の場での教え方としては適切ではない。特に大学教育という場を考慮すれば，やはり原理的な説明をすべきであろう。

12）ｒ化音の音韻変化については「『现代汉语词典』第五版　商务印书馆　2005年」の「3注音」３.６（ｐ４）に詳しい。

13）拙著　上掲論文　注１）に同じ

14）同上

15）子音、鼻母音いずれも3秒で暗記することを課し，今年の1年生は全員3秒以内に暗記している。子音は2人の学生が2秒で暗記でき，ほとんどの学生が3秒かかっていない。21個ある子音よりも16個ある鼻母音が何故時間がかかるかと言えば，鼻母音はいずれの音節も一定の長さを持っているからである。子音を暗記することによって，ピンインを見ての発音がしやすくなるし，鼻母音を暗記すれば，発音練習上受ける最大のプレッシャーを克服することができる。中国語の発音に親しみが持てるようにする学習法である。